

「トマト」

太田衣緒

登場人物

男

女

死者

場所

何処かの畦道

明かりが点くと、舞台には男と女。

夏。酷く暑い真っ昼間。頭上には、カンカンと照り付ける太陽。

女は白い日傘を差している。

男と女が、舞台の両端で、向き合って立っている。

二人の間、つまり舞台中央には、二人とは対照的に、一人涼しそうに若い

男が仰向けに寝ている。若い男は、死者。

死者は、腹の上に抱えるように、赤いトマトを抱いている。

蝉の声が煩い。

男と女は、互いを窺いながらも、そこに寝ている死者への注意を逸らさない。

暑い。暑い。物凄く暑い。

と、女が一步前へ足を踏み出すと、男も一步踏み出す。

男がまた一步前へ踏み出すと、女も一步踏み出す。

じりじりと、無言のまま、恐る恐る、死者へと近付いて行く男と女。

———
漸く死者のもとへ辿り着いた二人。

死者の頬を叩いてみたり、胸に耳を当ててみたりする。

女 …… どうですか？

男 息をしない。

女 と言うと？

男 死んでいます。

女 まさか…

男 (女を見る)

女 …… 傷は？

男 綺麗な体です。

女 ええ。病気でしょうか？

男 まるで昼寝をしているようだ。

女 スウスウト、寝息が聞こえるよう…

二人 ……

男 どちら様ですか？
女 知らない女工です。

男 え？

女 チョコレート工場で働いています。

男 嘘だ・・

女 え？

男 全然チョコレート臭いがしない。

女 チョコレート工場で働いているからと言って、チョコレート臭いがするとお思いですか？

男 そんな話を聞いたことがあります。

女 どちらで？

男 マヨネーズ工場に四十年勤めた友人が言っていました。

女 チョコレートの臭いがすると？

男 マヨネーズの臭いが染み込んでいます。

女 マヨネーズ工場はそうなんでしょう。でも、チョコレート工場は違います。

男 そうですか。

女 疑っておられるんですね？

男 え？

女 それは貴方、差別ですよ。

男 差別？

女 もしくは、偏見です。

男 かもしれません。

女 毎日毎日、同じ速度で流れてくるベルトコンベヤーに乗った箱に、毎日毎日同じチョコレートと同じ場所に詰めています。あんまり毎日毎日やり過ぎて、夢にまで見るんです。私がベルトコンベヤーに乗って流れて行く夢を。

男 貴方自身がチョコレートになっちゃったという、逆説的な夢ですね？

女 そしてその夢では、ぐんぐんぐんぐんベルトコンベヤーの速度が上がって行くんです。

男 それは大変です。

女 目が回るんです、とても。

男 ・・・しかし、私が尋ねたのは、貴方のことではなく、この方のことです。

女 でも、可笑しいですね。

男 はい？

女 私が伺ったお話とは少し違います。

男 何が？

女 マヨネーズ工場に四十五年勤めた親類の話ですと、滑ると伺いました。

男 滑る？

女 床がツルツル滑ると。だからどんなに急いでいても、一步一步慎重に、確かめるように、踏みしめるように歩かなければならないと。何が不幸かって、四十五年も勤めると、その習慣が染み込んでしまっって、いつでも何処でもそうやって歩くんです。ですから彼は、何処へ行くにも、人の三倍の時間が掛かるんです。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
でも、いつか行きたいと思っています。必ず。
そうですか。
ええ。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
僕は、アフリカの手前まで行ったことがあるんですけどね、暑かったですよ、物凄く。
そうですか。

ええ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
でも、これ程では無いでしょうか？

どうかな。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
でも、アフリカではないんでしょう？

何が？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
貴方が行かれたのは。

ええ。その手前です。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
だったら・・・

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
手前であの暑さです。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
「あの」と言われましても・・・

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
それはもう・・・

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
いつの話です？

え？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
アフリカの手前に行かれたのは？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
二十年くらい前の話です。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
記憶なんてものは、何の頼りにもなりませんのよ。だってほら、「あの」と同じで、記憶

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
には実態がありませんでしょう？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
実態？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
私は今、実態として、この暑さを語っているんです。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
・・・

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
きつと、あのキャスターも一緒です。

女、空を仰いでいる。

男も空を仰ぐ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
眩しい。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
(男を見る)

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
実態として。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
(再び空を仰ぎ) ええ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
それから、女、ふと死者に目を落とす。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
あ、・・・

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
え？

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
汗をかいています。

ええ。
この方。
え？

ほら・・・そりやそうです、こう暑ければ。

・・・

それにしても、人間ってものは汗をかくと美しくなる。どうしてでしょう？

はあ・・・

陽炎のせいかしら？

え？

私の目の上を流れる汗が、陽炎を作るんです。

(女を見る)

あ、・・・

(汗を拭う)

垂れましたよ、貴方の汗。この方の臉に。

すみません。

気を付けないと。

はい。

あらあら・・・

私の汗ですよ。

え？

さっきのも。貴方は見ていなかったけど、私の汗が、この人の額に垂れたんです。

そうでしたか？

はい。

気を付けないと。

はい。

じゃあ、もしかして、これも？

女、死者の抱えるトマトを見ている。

はい。私の汗が、このトマトに垂れたんです。

まあ・・・トマトが汗をかいたのではないんですね？

トマトはもつと細かい汗をかきます。

ええ、そうですね・・・

女、死者が抱えるトマトにそつと息を吹きかける。

男、つられる様に、女の視線の先に目を渡す。

・・・やっぱりそうだ・・・！ほら・・・！

どうしました？

鹿兒島・・・！ここ、これです。見えませんか？

男 女 男

女 男 女 男

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

蝉がけたたましく鳴く。
と、女はトマトに視線を移している。

男 女 男 女 男 女 男 女

kagoshima・・・

はい。

私は産地には拘らないんです。

でしたら、何に拘るんです？

赤い色。

赤い色？

赤いトマト。

トマトは大概赤いです。

女、トマトにそっと手を伸ばす。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

あ、・・・

・・・？

いけません。

何が？

触っては。

何故？

何故って・・・

欲しいんですよ。

欲しい？

ええ。

これが？

ええ。

冗談ですか？

冗談ではありません。

では、何ですか？

私はこれが欲しいのです。

・・・

女、改めて、ゆっくりとトマトへと手を這わせる。

男 女 男 女 男 女

(それを制止するように)欲しいからって、触るんですか？

欲しいから触るのです。

待ちなさい。

・・・？

ここに私も居るんです。

・・・？

男 可笑しいじゃないですか、それは。どさくさに紛れて。
女 だって、この方が・・

男 この人が何です？

女 今、ため息をおつきになりましたわ。

男 (死者の口に耳を近づけ)・・騙されませんよ。

女 何？

男 彼はため息などついていません。

女 では、黙かしら？

男 貴方は、トマトがお好きなようですね？

女 どうでしょうか。

男 それとも、お腹を空かせている？

女 割と。

男 しかし、貴方は弁当を持参している筈だ。さつき、そう言いましたよね？

女 ええ。

男 中身は何ですか？

女 中身？

男 弁当の中身です。先ほど、聞きそびれました。

女 私も、卵焼き。それに、ウインナーと、小松菜の胡麻和え。沢庵が三切れです。ご飯に

は、白胡麻を振りかけました。

男 それでは足りないんですか？

女 え？

男 ウインナーが三つか五つか、ご飯が一合か二合かにもよりますが、残念ながら、トマト

は腹の足しにはなりません。

女 同感です。

男 それとも、ビタミン不足を補おうと？もしくは、色合いの調整ですか？女性は総じて、

バランスに気を配るものです。

女 ・・

男 しかし、良いですか？貴方が普段どちらで買い物をしてるか存じませんが、私が知

る限り、この辺りの商店、スーパーマーケットにおいて、鹿児島県産トマトは、なかな

か店頭には並ばないんです。

女 それが？

男 ところが、これは、このトマトには、kagoshimaの文字が・・!

女 宜しいですか？

男 どうぞ。

女 今、時計を確認したんですけどね、お昼休みが終わるまで、あと二十分しかありません。

男 (腕時計を見て) 私も、大体そんなところです。

女 私は優良な従業員なんです。時間に遅れたことはありません。ですから、始業時間のベ

ルが鳴るあと二十分の間に、お弁当を食べ終え、坂を少し下って工場に戻らなくてはな

りません。出来れば、お手洗いも済ませたいです。次の休憩までには時間がありません

ら。

女 男
つまり？

女 男
貴方と、此処でこうして不毛な会話をしている暇は無いのです。

女 男
同感です。

女 男
同感？

女 男
私も、全くそうだと思っていました。思っていたけど、口にはしなかったんです。

女 男
でしたら、私を一人にして頂けませんか？

女 男
それは？

女 男
私はこれから、此処でお弁当を頂きますから、貴方は何処か他所へ移って下さい。

女 男
どうしてですか？

女 男
だって、こうして一緒に居ますと、貴方はまた取り留めの無いお喋りを始めるでしょう？男の人は至ってそうです。沈黙を嫌うのです。

女 男
・・・

女 男
申し訳ありませんが、私は急いでいるんです。

女 男
それは出来ない相談です。

女 男
何故？

女 男
僕も、此処で弁当を食べます。

女 男
貴方は、私をクビにするんですか？

女 男
クビ？

女 男
午後の仕事が始まるんです。貴方と並んでお弁当を食べる訳にはいかないんです。

女 男
貴方は優良な従業員なのでしょう？ならば、一度遅れたくらいでクビになどなりませんよ。

10

女 男
貴方は労働を侮っている！良いですか？一度でも遅刻をしようものなら即クビです。私
が例えば居なくても、時間になればベルトコンベヤーは動き出します。貴方はご存じない、
百人居ようが、一人の穴は埋められないのです。それが労働と言うものです。加えて、
私の後続く人々の混乱を想像して下さい。チョコレートの一つ欠けた、あるべき所に
あるべきチョコレートが無い箱が流れて来るのです。そうと分かりながらも、彼女達は
自分のチョココレートを自分の位置に置くことしか出来ない。ベルトコンベヤーの速度は
一定で、決して変わらないからです。

女 男
・・・

女 男
そうです。一人の人間が二つもチョコレートを入れられるような、そんな生半可な速度
でベルトコンベヤーは動いていないのです。つまり、私が十分遅刻をすれば、その十分
間に生産されたチョコレートは欠陥チョコレートとなり、市場に出ることもなければ、
十分間の九十九人の労働は意味を失うのです。それがどれ程の責任であるか、いいえ、
罪であるか、計り知れないものです。貴方は私を罪人にするのですか？

女 男
貴方は、御自分の仕事に誇りを持っているのですか？

女 男
それは当然ではありませんか？

女 男
私は違います。

女 男
・・・？

女 男
私は、労働を嫌悪しています。

女 男
どうしてでしょう？

男 酷く退屈で、詰まらないものだからです。
女 労働とは、そういうものです。

男 そうなんです。頭では分かります、私も大人ですから。だからと言って、どうすることも出来ず、今日も嫌々労働に励みました。そして午後も、同じく労働を続けるでしょう。

女 続けなさいな、黙々と。

男 ……!

女 こんな所で油を売っている暇は無いです。

男 今は休憩時間なんです。

女 貴方のような方は、休みなんて返上して労働すべきです。

男 何故です？

女 余計なことを考えない為です。

男 出来ません！

女 何が？

男 毎朝毎朝、家を出るのが嫌で嫌で仕方が無い。この僕から、唯一の息抜き、休憩時間まで奪うのですか？

女 貴方は、何を求めているのでしょうか？
男 求める？

女 貴方はきつと、とても壮大な、けれどとても幼稚なものを求めておられるんじゃないかしら？

男 僕が求めているものは、自由です。

女 ほら。

男 ほら？

女 私は毎日八時間、工場で労働しています。通勤時間は一時間。行き帰りで二時間です。工場での仕事を確実にこなすには、健全な集中力が必要です。その為には、一日八時間の睡眠を確保しなければなりません。その他、食事や入浴の時間諸々で二時間。掃除、洗濯諸々の時間が一時間。犬の散歩もあります。犬は私の自由で飼っているのです。散歩の時間は勘定に入れないことにします。これで全部で二十一時間。つまり、一日の内、私に許された自由は三時間になります。

男 八分の七の不自由と、八分の一の自由……

女 私はその八分の一の自由さえ、無くなればと思っています。

男 どうしてでしょう？

女 人は自由を与えられると、決まって罪を犯すからです。

男 ……

女 罪は言うまでもなく、罪深いものです。

男 男の汗が、またポタリと死者に滴る。

女 男、汗を拭う。

女 貴方は、汗をかくのが嫌いですか？

男
いいえ。汗をかくのは好きです。生きているという実感を持てます。
女
ええ。私も、この汗の臭いが堪らなく好きです。

女、死者に垂れた男の汗をハンカチで拭い、臭いを嗅ぐ。

女
貴方の汗とこの方の汗が混じって、不思議な香りがします。

それから、愛おしそうにトマトを眺める。

男
私もですよ。

女
え？

男
ご存知でしょうが、私も欲しいんです。

女
これを？

男
そうです。

女
どうして？

男
どうして？

女
困りますよ、それは。

男
どうして？

女
一つしかありませんもの。

男
ええ。

女
私が先ですよ。

男
何が？

女
私が先に、この人と、この人の抱えるトマトを見つけました。

男
いいえ、私が先です。

女
何を仰いますか。

男
私がこの人と、その腹にあるトマトを見つけたと思ったら、貴方が現われたんです。

女
それは違います。私がこの人を見つけて、それから、おやおや、あの方のあのお腹の上
男
になっている赤い物は何かしら：？と違って目を上げたら、貴方が顔を出したんです。
女
随分と見解が食い違っています。

男
ええ。

女
目撃者は居ないのか・・・！真実を知り、審判を下す者は・・・！

男
居ますよ、此処に。

女
え？

男
この方の目には明らかです。

女
そうだ・・・！しかし、彼は目を閉じている。

男
口も閉ざしています。

女
それでは困る。

男
ええ。

二人

男
でも、貴方は産地には拘らないのですよね？

男 女 男 女

．．？

トマトの産地です。そう仰いましたね？
ええ。

でしたら、私にお譲り下さい、このトマト。
どうして？

貴方も先程確認されましたね？ここには、ほら、kagoshimaの文字が刻まれています。
だから？

私は産地に拘るんです。

良いですか？どうして、これを鹿児島県産と断定出来るんです？

だって、記してあるじゃないですか。

何処産のトマトにだって、kagoshimaと記すことは可能です。

それは滅茶苦茶だ。

第一、生産者が、商品に直接ハンダゴテで焼き付けますか、産地を？他に見たことがあるんですか、焼き付けられたトマトを？．．つまり、これは誰かの悪戯なんです。

ハンダゴテではないかもしれない．．

良いでしょう。

何が？

いずれにしても、私は真実を蔑ろにしたくはありません。

産地のことですか？

産地は最早分かりませんよ。

では？

私が先に、この人と、このトマトを見つけたんです。

残念ながら、私が先です。

どうして嘘をつくんです？

貴方こそ。

私が嘘をついていると？

ええ。

どうして、そういう嘘をつくんでしょう？

真実の一つです。

そうです。

しかし、それを立証する唯一の目撃者は、目も口も閉ざしているんです。

ええ。

ならばこの際、どっちが先かは問題になりません。

駄目ですよ。

だって、立証不可能な点で争ってみても、結論は出ないじゃないですか。別の観点から見直すべきです。

納得いきませんかわ。

何？

はい？

私は、百歩譲っているんですよ。

女 …？
 男 私が先に見つけたと言う真実は、菌痒いながらも立証できません。ですから、その真実
 女 を一旦藪の中に葬って、新たな発想に転じ、提案しているんです。
 男 貴方は、平気で真実を歪めるのですね？
 女 何だと？
 男 そうでしょう？
 女 どうやら、貴方は大変賢い女性のようにです。
 男 そうでもありません。
 女 しかし、私だって負けませんよ。
 男 頭が宜しいんですか？
 女 いいえ。私の頭脳も人並み程度。ですが、私には強い意志があります。
 男 これを欲しいと？
 女 そうです。
 男 私もです。
 女 ……どうして譲ってくれないんですか？
 男 見つけてしまったからですよ。
 女 ……
 男 もう一度言います。私はこれを、どうしても欲しいのです。
 女 私も欲しいのです。
 男 またまた…
 女 何ですか？
 男 どうしてもでは無いでしょう？
 女 どうしてもです。
 男 どうして？
 女 え？
 男 どうして、貴方はこれをどうしても欲しいんですか？
 女 どうしてもだからです。
 男 どうしてもだから？
 女 ええ。
 男 意地悪は止めて下さい。貴方と違って、私はこれであれば駄目なんです。
 女 鹿児島県産ではありませんよ。
 男 信じない！
 女 ……
 男 証拠を見せろ！鹿児島県産でないと言うのなら、鹿児島県産でない証拠を！
 女 証拠はありません。
 男 ほれ見たことか！
 女 鹿児島県産でない証拠も、鹿児島県産である証拠もありません。
 男 いいえ。証拠があります。
 女 何処に？
 男 ここに（自分を示す）。僕が確信し、続いて Kagoshima と確認し、やはり鹿児島だと認識

した。貴方にとって鹿児島県産か、そうでないかは問題でないので。僕にとって、紛れもなく鹿児島県産である、それが問題なのです。つまり、証拠は僕です。そういう事でしたら、そうなんでしょう。貴方にとっては鹿児島県産なんでしょう。そうです。

でもね、私ですよ。

何が？

これじゃなければ駄目なんです。

嘘だ・・

見つけてしまったんですから。

どうして？

もう駄目なんですよ。

・・分かりました。

分かってくれましたか？

争うのは止めましょう。

ええ。

お願いします。

・・？

私にこれを下さい。

それは出来ません。

I want this tomato no matter what.

英語で言っても駄目ですよ。

私と貴方、二人だけの小さな世界の話ではなく、全世界的、宇宙的規模の話だと言うことです。

そう思っていますよ、私だって。

・・時間が無いんです。

私ですよ。

そうでしょう？

女、死者の髪を撫で、整えている。

雨なんか降っていませんよ。

え？

どうして、そんなものを差しているんです？

プロテクト。

は？

女、死者の顔の上に日傘を添える。

お顔をプロテクト。

彼が憎らしくなってきました。

男 女
・ ・ ・
一言で良いんだ。いや、喋らなくても良い。ただ頷いてくれさえすれば ・ ・ ・ ! そうすれば、正しい審判が、僕を ・ ・ ・ !

女の日傘が、くるくる回っている。

男 何故です？

女 何です？

男 何故、貴方は、この鹿児島県産トマトでなければならないのです？

女 ならないとは言ってません。

男 だったら ・ ・ ・ !

女 貴方こそ、何故です？

男 さつきも申し上げましたが、なかなか手に入らないんです、鹿児島県産トマトは。

女 ・ ・ ・

男 では若し、此処にこうして、群馬県産トマトがあつたとしても、貴方はそれを欲しいと主張するのですか？

女 それは分かりませんか？

男 私は違います。群馬県産でしたら、私はいらぬ。

女 群馬県産でしたら良かったですね。

男 何故だ ・ ・ ・ ! 何故これなんです ・ ・ ・ ! 美味しそうだから？ 取り立てて言うほどでもない ・ ・ ・

女 それとも美しいから？ これくらいの物はいくらでもある ・ ・ ・ でも私は、例えこれが不味

男 そうでも、醜くても、緑色でも、形が歪でも、腐って悪臭を放つていても、絶対にこれ

女 を欲しいと思うのです。何故ならこれは ・ ・ ・ !

男 鹿児島県産だからでしょう？

女 そうです。

男 貴方こそ、鹿児島県産トマトでしたら、他にも沢山ありますよ。

女 え？

男 鹿児島県産トマトは、世界にただこれ一つなんですか？

女 いいえ。

男 そうでしょう？

女 でも、今此処にはこれしか無い。

男 これから何処かへ探しに行けば良いでしょう？ 何なら、鹿児島まで。そしたらもう、両

女 手に抱え切れない程の鹿児島県産トマトが手に入るでしょう。

男 それは出来ません。

女 どうして？

男 今、こうして目にしているんですから、これを。

女 (トマトをじっと見て) ・ ・ ・ ええ。

男 それに、時間ありません。

女 ええ。

男 ・ ・ ・ 貴方は狡い。

女

男

女

女 男 女 男 女
・ ・ ・
まだ何も説明していない。
これを欲する理由ですか？
そうです。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
どうして、そんな個人的なことを、見ず知らずの貴方に説明しなければならないのです
よう？

僕だって説明しました。

貴方が勝手になさったんです。

何故なら、僕も貴方も、ただ一つしかないこれを、欲しいと主張しているからです。

だからって、理由を説明し合う理由にはなりません。

では、どうするんです？

貴方がどんな理由をお持ちであろうと、私の腕は真っ直ぐにこちらへ向かうのです。

分かりません。

結構です。

貴方はとても身勝手だ。

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
正確には、私ではなく、私の腕が、これを欲しているのかもしれませんが。ですから、私
には止められないんですよ、この腕が、これに、こうして近付いて行くのを（トマトへ
向かう腕を苦しそうに押さえている）・ ・ ・そんなに言うのでしたら、いっその腕を切り
落として下さいな。そうすれば、私もどんなに楽になることか・ ・ ・！
突然、アフリカの手前に来たようです！

女の腕が止まる。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
貴方の言っていることが、まるで分からない。もしかしたら、私の耳が故障を来したの
か・ ・ ・？

或いは、そうかもしれません。

いいや、正確には、貴方の頭の中身が分からない。弁当の中身なんてどうでも良いんだ。

僕が解明しなければならぬのは、貴方の心だ。

私だって分かりませんよ、貴方の心なんて。

しかし、解明し合わなければ、決着がつかないじゃありませんか！違いますか？

ねえ。

はい？

あまり大きな声を出すのは止しましょう。

・ ・ ・

女、死者の頭部から顔、首、胸、腹へと、そっと手を這わせて行く。
そして、その手はトマトへ向かう。

止める。

（ピタと手を止める）

男
やはり此処はアフリカの手前ではない。今、僕の目がそれを確認しました・・・どうやら貴方は、巧妙な詐欺師のようです。しかし、貴方が何者であろうが構わない。どうかお願いです。貴方に慈悲の心があるのなら、それには触れないで下さい。

女
私を誘惑するのです。

男
誰が？

女
この赤いトマトが。

男
何故、トマトは赤いんだ・・・緑色なら・・・お前が緑色でさえあれば・・・

女
(トマトに耳を澄ませて) トク、トク、トク・・・やはりこの方、生きていますよ。

男
え？

女
トクトクトクと、ゆっくりと脈を刻んでいますもの。

男
何が？

女
このトマトですよ。

男
ほう。

女
貴方の方こそ、慈悲の心をお持ちじゃないんですか？求めるばかりで、与えてはくれないのですか？

男
他のものでしたら、何でも差し上げましょう。

女
私は、そんなに移ろい易い女ではありません。私が欲しいのは、ただこのトマト。

男
何故？

女
とてもとても欲しいから。

男
何度も言いましたように、それでは可笑しいのです。

女
何故？

男
欲しいから欲しい。これは確認です。理由では無い。

女
理由・・・

男
ええ、理由です。貴方は不要と申されましたが、それは貴方には理由が無いからでしょう？貴方はただ、僕を困らせたいんだ。

女
お言葉ですが、貴方にも子供時分があったと思います。玩具を欲しがる子供に、その理由をお尋ね下さい。返ってくる言葉は、「欲しいから」。これの他は無いはずですよ。「欲しいから欲しい」、これ程純粹で、意志の強い理由がありますでしょうか？

男
貴方は子供じゃない。

女
その昔、子供でした。

男
・・・僕には理由があります。貴方よりも強く、正当な。

女
お聞かせ願いますよ、手短かに。

男
僕は恐ろしい。

女
何が？

男
これが。

女
これが？・・・どうして？

男
・・・

女
喜んでいたじゃありませんか。鹿児島県産に拘っているのでしょうか？

男
・・・

女
じゃあ、どうして近付いて来たんです？

男 怖いもの見たさです。
女 美しいものは恐ろしいんです。
男 恐ろしくないものは、美しくもない？
女 ええ。

男 ・・ならば、僕は、美しいものも、恐ろしいものもいら
女 どうして嘘をつくんです？
男 嘘ではありません。
女 欲しいと言ったじゃありませんか、あれ程までに。
男 ええ、欲しいです。体の底から欲しいです。でも、恐ろしいんです。
女 でしたら、お行きなさいな。
男 え？

女 見たんですから、お行きなさいな。
男 何処に？

女 ・・（何処かを指し）あっちに。
男 嫌です。

女 （別の方向を指し）あっちでも良いですよ。
男 嫌です。

女 じゃあ、あっちですか？
男 指図しないで下さい。

女 してませんよ、指図なんて。あっちでも、あっちでも、あっちでも良いと言っているで
男 しょう？

女 僕は、あっちにもあっちにもあっちにもあっちにも行かない。
男 じゃあ、どっちに行くんです？

女 （また別の方向を指し）あっちです！
男 そう！あっちですか！

女 ええ！あっちです！
男 さあ！あっちへ！

女 ・・あああああああ！
男

男、突如トマトを掴む。

女 ああ・・・！
男 ・・・・

遠くで、教会の鐘が鳴る。

男 ・・午後の礼拝の時間です。
女 こんな時間に、礼拝に行く人々がいるのかしら？
男 居ますよ、ほら・・鳥達が。
女 ・・何をするんですか？

女 男 女 男

．．．
潰れてしまったじゃないですか、私のトマト．．．返して下さい。
潰れていますよ。

貴方が潰したんでしよう？

貴方のせいですよ。

どうして？

貴方が強情だから。

どうして？

貴方が意地悪だから。

それでも返して下さい。

食べられません。

食べられない？

汁が零れている。

．．．

無残な姿だ。

どうして、そう乱暴をするんですか？

．．．

返して下さい。

いつから貴方のトマトになったんです？

貴方はいらないと言った。恐ろしいものはいらないと。

いらないとはいっていない。

言いましたよ、美しいものも、恐ろしいものもいらないと。

だとしても、貴方のものにはならない。

貴方のものでも私のものでもなくなってしまうたら、このトマトは誰のものになったら

良いんです？

彼のものです。

彼は手放したんですよ、このトマトを。

とんでもない。雷が落ちようが、地が裂けようが、この星が果てるまで、一度掴んだも

のを手放してはいけないんです。それを奪う権利も、我々には無いんだ。

何を言っているの？

貴方が封じ込めたんです。

．．．？

僕の心を。

どういうことでしょうか？

I want this tomato no matter what．．．

自分の言葉には責任をお持ち下さい。

責任を持って撤回します。

でも貴方は、同時に恐ろしい。

．．．

貴方には、そんな勇氣は無いはずですよ。

女 男
返して！・・・早く！

男、潰れたトマトを死者の手の中へ戻す。

男 女 男
誤解しないで下さい。僕は貴方に返したんじゃない。彼に返したんです。
・・・
きつと同じくらい、彼も欲しいんです、このトマトが。だから返すんです。

女、死者の手の中の潰れたトマトに耳を澄ませる。

男 女 男
どうですか？
何？

男 女 男
脈を打っていますか？

女 男 女
聞こえないわ。

男 女 男
僕のせいですか？

女 男 女
何故、泣いているんです？

男 女 男
雨なんか降っていないんです。

女 男 女
ええ。

I want, want this tomato・・・僕は、僕の為に欲しいのではない。

男 女 男
誰の為に欲しいのです？

女 男 女
トマトを愛した、トマトのような女の為です。

男 女 男
だから貴方はトマトを愛する？

女 男 女
いいや、愛するのでも、欲するのでもなく、掴まなければならないのです。絶対に。

男 女 男
・・・お行きなさいな。

女 男 女
何処へ？

男 女 男
お好きな所へ。

男、踵を返して去りかけ、数歩先で立ち止まる。

女 男 女
何故止まるのです？

男 女 男
教えて下さい。

女 男 女
何ですか？

男 女 男
何故、自由は罪を犯すのか？

女 男 女
だって、八分の一の自由で、私はこうしてトマトに手を伸ばしてしまいます。

男 女 男
・・・

女、腕時計を確認する。

女
ベルトコンベヤーが動き出しました。

男 女

え？

お昼休みは終了しました。

すると、舞台は夜になる。

男

・私はトマトが嫌いです。嫌い？いや、嫌いという言葉では物足りない・憎い。そう、私はトマトが憎いです。憎くて仕方ない。この奇妙な謎の塊・人は、理解できないものを最も恐れ、憎むとは、これは真です。(トマトを貪り食いながら)私はトマトが嫌いです。子供の頃から嫌いです。でも、君は好きだった。鹿児島出身の君は、いつでもトマトを食べていた。夏野菜は体を冷やすから、そんなに食べるのは止しなさい。いくら注意しても、君はまるで耳を貸さなかった。四年前、緑茂る丘の麓の教会を望みながら、君は無邪気に、もぎ立てのトマトをひたすらに、止めどなく頬張っていたね。そのまま君は、あの教会に眠ってしまった・

先程よりも近くで、教会の鐘が鳴る。

何故だ・でもね、僕も今では知っている。あの日あの時、まるで冷凍保存したかのように、あのまま教会に納められたのは君だけじゃない。僕の肉体も、僕の魂も、あの日あの時、君と一緒にあの教会の中に眠ったんだ。それなのに何故、僕はこうして物を食い、思考しているのだろう・その謎を解く為に、僕は食いつける・僕はこの大いなる矛盾をいつまで彷徨うのだろう？つまり、君という記憶の中で、トマトという実態を食いつける。こうして憎き憎きトマトを、しかし愛しき愛しき女が愛したトマトを、僕は食いつける・

突如、ザアザアと雨が降って来る。

今夜は雨が降っています！雨よ、もっと降れ！そして俺の髪を濡らしてくれ！鹿児島県産トマトを食べながら、僕は今日も君を想っています・美味い！

ピタと雨が止む。

女は弁当を食っている。